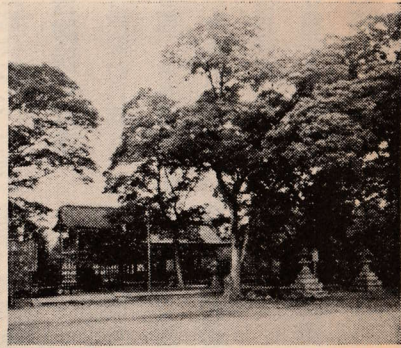


京都市南區吉祥院政所町
吉祥院天満宮社務所内

吉祥院六齋保存会



無形文化財
京都吉祥院
六齋

六齋ろくさい（略記）

一、沿 革

六齋とは六齋念佛踊の略名で、昔佛教徒が齋戒奉仕する。八、十四、十五、二十三、二十九、晦日の六齋日に行つた宗教行事から起り、今から約千年前に、空也上人が、民衆教化のため京洛の街頭に立つて、鉦や太鼓を打ちならし、身振り、節面白く讀経念佛を唱えて廻つたことから始まつたと伝えられてゐます。

最初は、僧俗混浴し、後に俗人のみで行はれるようになると共に、陰氣なものから段々陽氣なものになり、農村娯楽として工夫、加味充実され、青年によつて引繼がれて、現在の六齋にまで発展し、京都特有の郷土藝能として、廣く紹介せられるようになりました。

従來京都市周邊農村各地で多数の組が組織され、互に技を競い非常に盛んでありましたが、時勢の推移と共に都会化し、生活や趣味、娯楽も変り次々に消滅し、最近多少復活しましたが、十数組になつてゐます。

二、吉祥院の六齋

吉祥院の六齋は、其の中でも最も歴史古く、中絶することなく繼續し、技も勝れ、組数も多く、又地理的にも概、中央部に位置し、古今を通じ自他共に許す中心地として知られて居ります。現在、吉祥院六齋保存會のもとに、東條組、西條組、菅原組、北條組、石原組の五組が有り、先年六齋念佛踊の代表として無形文化財に選定されました。

各組共に、十五才から三十才乃至三十五才迄の青年を中心に組織し、毎年七、八月になれば練習し、社寺への奉納、祖先への回向等に演ずる外、頼まれ、ば隨所で上演します。特に毎年八月二十五、六日には全組揃つて吉祥院天満宮の夏祭當日に奉納する事が、年中最大の行事となつて居り、この奉納六齋大會は、以前京路に存在する六齋組の大半が集り、晝夜連續上演した長い歴史と伝統を有し、現在でも最も晴の舞台として居り、その盛観は廣く知られ、京都の夏の有名行事の一つとなつて居ります。

近年郷土藝術として、その良さを知られ歓迎せられるようになってからは、年中不定期に出張上演する機會が多くなりました。

三、六齋の実際

一組總員三十名余の者が、揃の浴衣を着て、笛、鉦、すりがね、大太鼓、中太鼓、豆太鼓等の楽器を用い、特殊な藝には、特別の衣裳と道具を使い、夫々特技に應じ分担して演じます。

曲目は、發願、邯鄲夢の枕、こんかい、つゝて、すがらき、お月さん、妹脊山、牡丹、立浪、お半長右衛門、八兵衛、朝野、三戀慕、でんぼ、石橋、晒布、鐵輪、四ツ太鼓、玉川、羽衣、八島壇の浦、祇園囃、芦田ヶ原、大文字、猿廻し、館屋、盛衰記、芋瀬、潮波み、手習子、頼光、獅子太鼓、安達ヶ原、道成寺、和唐内、岩見重太郎、本調子、しゃしゃらか踊、大久保踊、獅子と土蜘蛛等で、謡曲、能狂言、芝居、神樂、民謡等から採入れたものが多く、各組は、この中の自組保存曲（十五—二十）を一時間半乃至二時間で演じます。曲目中、同一のものも、組によつて、打方、動作等多少異り、夫々特徴を持つて居り、順序は不定ですが、發願で始まり、回向唄で終る事は共通してゐます。

上演中は殆ど無聲で、楽符は無く、これに代る古來から伝はつてゐる唄や詩、文句或は拍子を口づさんで行い、反復練習して覚えるので、年中練習をするのでもなく又、独習も出来ないもので、全曲を會得上達するまでには長年月を要し、特に主導役の笛の繼承には常に苦勞と困難が伴います。

最後に六齋は、百聞も一見に如かずの好例で、一度御覽になつて始めてその全容、価値が判つて頂けるものと信じ附記します。